
桜色・迷い道

ゆほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色・迷い道

【Nコード】

N8618K

【作者名】

ゆほ

【あらすじ】

血の繋がらない兄と妹。二人は兄妹として全く問題のない日々を送っていた。だが、心のうちに芽生えた気持ちの行き先が定まらず、それは道に迷った子供のようで・・・

桜を想う気持ち

私には血の繋がりは無いけど「お兄ちゃん」がいる。

お兄ちゃんに初めて会ったのは8歳の時で、その時お兄ちゃんは16歳だった。

第一印象は「大人っぽくて超かっこいい」

まあ8歳も年上なんだから大人っぽく見える訳なんだけどさ。

さすがにテレビに出てくるアイドルなんかよりは若干（でも本当に若干よ！）見劣りするけど、はつきり言ってクラスの男子なんか目じゃなかった。

小2男子と比べるのもなんだけど、その位私の心には花が咲いたってことよ。

ママ達の再婚で私は転校することになった。でも前学校の友達にも新しい学校の新しい友達にもお兄ちゃんは自慢の存在だったわ。

ママが仕事を続けていたから学童に入った。夕方家に帰ると部活を終わらせて帰ってきたお兄ちゃんがおやつにホットケーキ焼いてくれたり勉強みってくれたり毎日がすごく楽しかった。

4年生になってお兄ちゃんが大学受験の頃には、今度は私が夕飯の支度やお兄ちゃんの夜食を作ってあげていた。

ずっと同じ人だけじゃなかったけど、お兄ちゃんには常に「彼女」がいた。最初の頃は「お兄ちゃんはかっこいいんだから、彼女がいて当然！」みたいに思っていたけど、段々お兄ちゃんのことをかっこいいって思うだけじゃ済まなくなってきた。

なんていうかお兄ちゃんの隣りにいる女の人を消しゴムか何かで消したくなるような、心の中に黒い物体が発生することもしばしば出てきた。

でもね、私が高校生になってから「もしかしてお兄ちゃん、私のこと女の子として意識してる？」って思うことがあったんだ。そのときはお兄ちゃんに彼女がいなかったりしたから、「もしかして」ってすごい期待しちゃったの。だってそもそも私達血が全く繋がっていないんだから、その気になれば結婚だって出来るはず。

でも、お兄ちゃんの態度が徐々に変わっていった。

仕事が忙しくなったとは言っていたけど、金曜日の夜とかすごい香水の匂いをさせて帰ってくるようになって、しかも毎回匂いが違うんだよ。私のことを避けてる風でもあるし、かなり落ち込んだ。

落ち込んでいる私に同級生がある決断を迫ってきた。

返事をしなくちゃいけないけどお兄ちゃんの本当の気持ちも知りた

いから、でも直接聞くのは避けられている身の上ではかなり勇気のいることだったから、お兄ちゃんに相談を装ってメールをした。

その返事は一週間経っても来なかった。

多分それがお兄ちゃんの返事。

桜の散る夜

窓の外には細かい雨が絶え間なく降っている。

今週一気に開花した桜も雨雲を連れてくる突風とその雨によってあつけなく散るだろう。

先週末からやれ客と花見だ（その段階で咲いていた桜はわずか）。営業部の花見だ。営業統括部の花見だ。と連夜花見という名目の飲み会が続いていた。だが悪天候ということもあり今夜の花見はさすがに中止となった。

「桜一朗^{おういちろう}。花見は無理だけどどこかで飲んで行かないか？」
自席で作業をしてきた俺に声をかけてきたのは同期で営業の渡辺だった。

「いや、これ終わらしたら帰るつもりだ。最近酒抜けにくいし」

「ザルが何言ってる！女の子も何人か来れそうなんだぞ！」

「お前なあ。とにかく俺はパスな」

そう言ってプリントアウトした資料のチェックを始めた。渡辺は「気が変わったら連絡くれ」と言って戻って行った。

正直なところ亜美^{つぐみ}が起きている時間には帰りたくないと思っている。だが先週亜美からきたメールも気になって外で飲んでいても落ち着かないのだ。

作成した資料に問題はなかったので俺はサーバーにある上司のチェック依頼フォルダにそれを保存し帰り支度を始めた。

帰ってみると家は真っ暗だった。

一旦自分の部屋へ行きカバンを置いて上着をかけた。隣の亜美の部屋からは物音一つ聞こえてこない。もう眠ってしまったのだろうか？ 亜美が何時に寝ているかなんてことは最近の俺は知らない。

水分が欲しくなりネクタイを緩めながら下へ降りた。キッチンの明かりをつけると冷蔵庫に「父母再婚記念旅行に行きます」とメモが貼ってあった。毎年桜の時期になると「再婚記念」と称して二人は突然旅行に出かけるのだ。二人とも計画的な休暇が取れない仕事なのでその旅行はいつも突然であった。

溜まった録画でも見るか。

家が何故暗かったかということにとりあえず納得した俺はミネラルウォーターを片手に持ってリビングの明かりをつけた。

リビングのソファに膝を抱えて体育座りをし中に視線を放っている義理の妹、亜美がいた。

「亜美？」

どうした？と言いかけて俺は気がついた。ソファの前のローテーブルに「おたんじょうびおめでとうお兄ちゃん」と手書きされたケーキが置いてあったのだ。

亜美は無反応だった。

「ケーキ用意してくれてたならメールでもくれたら良かったのに」

亜美の態度からサプライズを狙っていた様子ではないことは分かったので、「どうして連絡してくれないんだ？」と問い詰めないような言い方にした。

「・・・先週のメールの返事もらってないのにまたメールするのってどうかなって思って・・・」

力ない様子で亜美が答えてきた。俺は「しまった!!」と思った。

「でも、もういいや。自分で決める・・・」

亜美は一度も俺の方を見ようとはしないで自分の部屋へ戻って行った。

桜の想い

先週、営業が客と花見をするから一緒に来ないかと言われた。

なるべく義妹の亜美つぐみが就寝してから帰宅したかったので、その誘いに乗った。

桜はほとんど咲いてなく寒い中外で酒を飲んでいるような状態だったから早めのお開きとなった。何人かは2次会へと流れて行ったようだったが、俺はそれには行かなかった。

駅のホームで電車を待っているとメールの着信があったことに気付いた。亜美からだった。

「クラスの男子から告白された。気になってる人がいるからと断ろうとしたら、その人と付き合っているわけじゃないなら試しに自分と付き合って欲しいと言われた。どうしたらいい？」

「ザル」もしくは「梓」と呼ばれるほど酒に強い俺なのに、このメールを読んだ時は二日酔いの状態で騒音の中に立っているような感覚に陥った。

亜美は「相談」をしてきた。だからここは「お兄ちゃん」として答えた方がいいだろうと思った。だがそう思って返信を打とうとするとその指が動かなくなる。

「お兄ちゃん」としてなら、「本気でも試して付き合えないと言っ

て、気になる人とやらにアタックしろ！」と言えいいのかもしれないが、恐らく100%確実に亜美の気になる人は「俺」なのだ。

そして亜美は俺が亜美を意識していたことを気付いている。自分が気づいてしまったことで俺が亜美との距離を保とうとしていることに傷ついている。

あの日まで亜美は俺の「妹」だった。8歳差だったのが良かったのだろう。忙しい親父や母さんの代わりのようなこともしてやった。おやつなんか作ってやると本当に喜んでくれた。調子に乗ってプリンに挑戦したときは失敗したが、それでも二人で笑って食べた。宿題もみた。風呂にも入れた。雷が怖いと言ったときは添い寝もした。

突然できた「妹」だったけど、兄妹としては全く問題ない日々だった。

母子家庭時代、保育所に預けられていた亜美はよく絵を描いて母さんを待っていたらしい。初めて見せられた絵は、絵のことが良く分からない俺にも子供が描くには少しもの寂しいと感じさせる作品だった。ところが親父がその繊細な仕上りに「才能があるかもしれない」とはしゃぎ出して、新しい生活が始まったばかりだというのは亜美を造形教室に入れた。

そこに通い出してから、そして忙しさは以前と全く変わらない両親と、兄が揃った生活が始まった亜美の絵は次第に明るく活発なものに変っていった。

色々な技術も習得したのだろう、なにより絵を描くことが好きだったのだ、去年亜美は美術大学付属の高校に入学した。

卒業・入学まであと1ヶ月という頃、出来上がった制服を亜美が着て見せてくれた。

その姿をみて俺は動揺した。

偶然だが亜美の制服の配色が俺の母校とほぼ同じだったのだ。エンブレムやリボンの形なんかは違うが、亜美を見ているとまるで好きになった同級生が目の前にいるような感じがして心臓が激しく動いた。

最初は亜美は見覚えのある制服を着ているせいだと思った。でも違った。次の日から亜美を見るたびに同じような感覚に陥った。

そうだ。

俺は亜美を好きなんだ。

桜の苦悩

俺と亜美は血が繋がっていない。だから全く問題はない。自分の想いを自覚した時、俺はなんら躊躇はしなかった。

当時付き合っていた彼女とはすぐさま別れ、都合が合えば休日には亜美を誘って二人で出かけたりもした。

このまま順調にいけば「結婚」してもいいとまで俺は考えていた。

だけど、ふと思った。16だった俺がその当時付き合っていた彼女と結婚を考えていただろうか？俺も彼女もそんなことは全く考えてはいなかったはずだ。ならば亜美は？亜美は俺と付き合いだして、このまま結婚を意識出来るだろうか？

それ以前に、小さい頃は「お兄ちゃん」として接してきた俺を本当に「男」として意識しているのだろうか？

亜美が俺に好意を持っていることは分かっている。でもそれが単に「憧れ」に過ぎないのではという疑念が生まれた。

自分の理性が「まだ子供の亜美に性急に関係を進めるな」と止めに入るが、その一方で独占欲という黒い欲望が「何も分からないうちだからこそ亜美を手に入れてしまえ、俺なしではいられないようにしてしまえ」と囁きかける。

俺は二つの相反する思いの渦に巻き込まれるような状態だった。なんとか理性を保とうと考えた俺は亜美との間に距離を作ることにした。

仕事が忙しくなったこともあるが、飲み会、合コン、誘われるもの全てに顔を出した。昔のような特定の彼女は一切作らなかったが、後腐れがなさそうな誘いにはすぐに乗った。亜美は突然俺が態度を豹変させたことに傷ついた。

俺は亜美の傷ついた顔を見たくなくて、帰宅時間をずらした。

俺は亜美がどんな高校生活を送っているのか知らない。知りたくなかった。何かを知ってしまったえばそれが火種となって亜美への独占欲がまた再び芽を出すかもしれないからだ。

亜美、亜美、亜美、求めるのは亜美の心と亜美との未来だけだ。

けれども俺が「好きだ」と言ってしまうえば亜美は簡単に頷くだろう。その安易さが大人になった亜美が本気で恋をしたとき悲劇を生んでしまう様に思えた。そんな未来のために亜美に好きだと告げるのは憚られた。

迷い子たち

2階へ上がった俺は自分の部屋を素通りして、隣りの部屋のドアを叩いた。

「亜美つぐみ入るぞ」

「・・・・・・」

返事はなかったが俺はドアを開けた。部屋の中のベッドにうつ伏せになって、顔を壁側へ向けている亜美がいた。

「・・・・返事なくて、悪かったな」

「・・・・・・」

「もう、決めたのか？」

「・・・・・・」

「亜美？」

今までダンマリを決め込んでいた亜美が起き上った。乾いた笑い顔でこっちを見て言った。

「お兄ちゃん、誕生日プレゼント下に置きっぱなしなんだ。こっちに持って来てもいい？」

「・・・・ああ」

「あっじゃあ座って目瞑って待ってて」

俺は亜美のベッドに座り目を閉じた。亜美の気配が消えて階段を降りて行く音がした。

どうせ戻ってくる時も足音が聞こえるのだから目を開けても良かったのだから、俺は閉じたままでいた。

しばらくすると亜美の足音が聞こえてきた。

「お兄ちゃん、今渡すから両手を出して」

俺は両掌を天井に向けて差し出した。

「もうちょっと両手の間を開けて」

言われた通りにするとガサツという紙の音が聞こえてきた。プレゼントは多分亜美が描いた絵なんだろうと思った。しかし、掌には何も置かれなかった。

「亜美？」

亜美の様子が知りたくなかったが、約束を守ったまま亜美に声をかけた。亜美は何も言わなかった。

突然唇にやわらかなものが触れてきた。亜美がキスをしてきたのだ。一瞬触れて離れるつもりだったのだろうが、俺は反射的に広げていた手を亜美の腰と後頭部に移しキスを継続させた。

「んふっ」

体をよじって僅かに抵抗している亜美は手を後ろにして何かを持っているようだった。

それは表彰状のような紙だった。俺はそれを亜美の手から抜き取り横に置いた。

両手が自由になったことで亜美が俺から逃れようとしてきたが、紙を置いたのとは反対側に亜美を押し倒し、さらに深い口づけを続けた。

唇、その奥を存分に味わうようにした後、亜美の顔ギリギリだが唇を離した。

熱を帯びた顔の亜美は瞳は驚きに満ちて潤んでいた。

「どうして？」

「誰とも付き合うな」

「どうして？」

「俺がいるから、ずっとそばにいるから、それでいいだろ？」

そうだ、もう「お兄ちゃん」なんて止めてやる。

俺は亜美をベッドから起こし、抱きしめながら思った。亜美がこの先他の男に本気の恋をするかもしれない。だからせめてその時が来るまで、いやその時が来ても亜美の心が自分に向くように最善を尽くしてやる。亜美のそばにいるのは俺だけだ。

「ずっとそばにいてくれるの？」

「ああ、ずっとだ。」

「私がお婆さんになっても？」

亜美は俺の首の後ろに両手を絡めて耳元に囁いてきた。

「そんな先のことはお前には分からないだろう？ お前はまだ知らないことが多すぎる」

「そんなことないっ！」

声を荒げた亜美は体を俺から少し離して顔を睨みつけながら言ってきた。

「私ってすんごいんだから。好きになった人はこれまで彼女切らしたことなくて、ここ1年くらいはそういう真面目なお付き合いじゃなくて、毎週違う女の人と仲良くしちゃってたりいてて、心の中は嫉妬の嵐で真っ黒だったんだよ。片想いしている友達にもこんな重苦しい片想いしてる子はいなよ。」

亜美の瞳に涙が溢れてきた。この1年亜美も本当に辛い想いをしていたんだと実感した。

「先のことなんて確かに分かんないけど、覚悟は出来てるんだからっ！！」

亜美がしがみついていた。俺は亜美の背中をそっと撫でた。

「・・・悪かった」

「お兄ちゃんは？覚悟はできてる？」

亜美が再び聞いてきた。俺は亜美から体を離して亜美の額に自分の額を当てて答えた。

「そんなのとっくの昔だ」

俺は亜美をそっと抱きしめた。

桜色の出口

小さい時お兄ちゃんが遊園地に連れて行ってくれたの。

母子家庭でお母さんは休日の仕事が忙しい人だったから、お兄ちゃんと行った遊園地が初めて遊園地だったの。

たくさんキラキラした乗り物があって、キョロキョロしてたらお兄ちゃんを見失っちゃった。

お兄ちゃんを探そうとするんだけど、やっぱり乗り物や景色に心を奪われちゃって、なかなかお兄ちゃんを見つけ出せないでいたんだ。

「亜美^{つぐみ}！」

声ができる方を真っ直ぐ見たら手を差し伸べてくれたお兄ちゃんが立って待っていてくれた。

私は迷わずお兄ちゃんの方へ走り寄ってその手を握りしめたの。

そうよ。お兄ちゃんがちゃんと手を差し出してくれれば私は何も間違えたりはしないのよ。

結局お兄ちゃんは私を8歳の子供まで見ていたんだと思う。失礼な話しよね。もう立派な16歳だっていうの。お兄ちゃんと初めて

会った時のお兄ちゃんの年なんだよ。

入学した高校の制服が意外にも初めて会った時お兄ちゃんが来ていた制服と似ていたので、後輩にでもなったような気分ですごく嬉しい気持ちになった。

お兄ちゃんが私を子供だと思うからこそ、私の未来を大事に考えてくれていることも分かる。分かるけどね。

なんていうか、いいんだよ。

お兄ちゃんが好きでそばにいたくて、それはお兄ちゃんとしてじゃなくて、ってちゃんと自覚してるんだからさあ。

お兄ちゃんに誕生日プレゼントを渡そうと思って、でもちよつとびつくりさせたかったら目をつぶってもらってたんだ。

目を閉じて私のベッドに座っていたお兄ちゃん。

あの時はもう兄妹としてしかそばにいられないんだって思ってたから、でもやっぱり好きだから、ちよつとキスしちゃえて思ってた実行了たら・・・

あーゆーのってどうなんだろう。

どっちもちゃんと告白とかしないまま、かなり濃厚、だったよなあ。

でもその時お兄ちゃんは「誰とも付き合うな」って言うてくれたんだ。本気の本気って？かなり何度も念押ししちやっただけど、お兄ちゃんは怯まなかった。

唯一つ、遠くて、でもいつからくる未来についてだけは断言するのを拒んだ。

お兄ちゃんが私の将来を束縛してはいけないと考えてくれての拒否だってことは分かる。でも私の本気も理解して欲しいよ。

今年のお兄ちゃんへの誕生日プレゼントは私の描いた絵にした。でもそれコンクールに出しちゃって現物はここには今はないの。

その代わり金賞をもらったから、その賞状を目録みたいに渡すことにした。

夕焼け色に染まり始めた桜の木を描いたその絵のタイトルは

「最愛
　　〽桜一郎様^{おういちろう}に捧ぐ〽
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8618k/>

桜色・迷い道

2010年10月14日12時14分発行